

未来に向かって その3

昨日の文章を踏まえ、今年の東大の国語第一問は、小酒井敏晶『『神の亡霊6』近代の原罪』からの作問でした。内容をかいつまんでここに書きます。

学校教育を媒介に階層構造が再生産される事実が、日本では注目されてこなかった。

教育機会を均等にすれば、貧富の差が少しずつ解消されて公平な社会になると期待されたが、しかし、ここに大きな落とし穴があった。

自由競争の下では、成功しないのは自分の能力がないからだとなり、社会の変革運動に関心を示さなくなる。

人種・性別などの集団間の不平等さえ是正されれば、各人の才能と努力次第で社会上昇が可能だと信じられている。米国社会も同じである。

子供を分け隔てすることなく、平等に知識を培う理想と同等に、能力別に人間を格付けし差異化する役割を学校は担い、能力主義が取り入れられたが、これが大きな罫だった。これこそ近代の袋小路である。

近代は神を捨て、個人という未曾有の表象を生み出し、所与と行為を峻別し、才能や人格という内部を根拠に責任を問うが、これは虚構である。各人の能力は、各自の内部に定立せず、あくまでも遺伝に始まる外来要素で成り立っている。

自由な個人が共存する民主主義社会では平等が原則であるが、現実には、ヒエラルキーが必ず発生し、貧富の差が生まれる。

支配は社会および人間の同義語である。支配関係は、強制力の結果としてではなく、正しい状態として感知され、自然の摂理のごとく作用する。

近代に内在する瑕疵を是正するために、正義が実現した社会を想像するものなら、格差がないということから、自分の劣等生ばかりが明白となり、そこは理想郷ではなく住むのに厳しい現実となる。

身分制度が打倒されて近代になり、不平等が緩和されたにもかかわらず、さらなる平等化の必要が叫ばれるのは、小さな格差に悩む人間が、自らの劣等性を否認するための手立てとしての防衛反応である。

自由に選択した人生だから自己責任が問われるのではなく、格差を正当化する必要があるから、人間は自由だと社会が宣言する。努力しない者の不幸は、自業自得だと宣告する。

近代は人間に自由と平等をもたらしたのではなく、不平等を隠蔽し、正当化する論理を変えたのである。

昨日の文章にリンクした内容になっています。東大のすごいところはここなのです。